くろんぼ学級物語

平野 彧著

＜著者紹介＞
平野　彧（ひらのいく）
1929年，宇都宮市に生まれる。
栃木県立宇都宮中学校卒業
栃木県下都賀郡藤岡町立赤麻小学校に勤務
第21回読売つづり方コンクール高学年の部
　日本一の作品を指導する。
著書，作文指導と学級づくり（明治図書）
　　こんな子はこう変わる（明治図書）
　　児童詩教育事典（共著，百合出版）
現住所，栃木県下都賀郡藤岡町南山3855

くろんぼ学級物語

©1974　著者　平野　彧
発行者　藤原政雄
印刷所　松沢印刷株式会社
発行所　明治図書出版株式会社
東京都中央区入船3—3—11〒104
振替東京151318　電話(551)8266
検印省略
1974年4月初版刊　(分)3037(製)8 427 00(出)8308

はじめに

この本の校正刷りが届けられた夜、近所に世帯を持っている教え子のひとりに読んでもらったら、

「まだ子どもだったから、自分ではそれほどには思っていなかったが、ずいぶんはずかしいようなことをして先生を困らせていたんだなあ。それにしても、今ごろ、みんないっしょうけんめいがんばっているんでしょうねえ。会いたいですね。」

と言って、彼は過去をなつかしんだ。

ここに出てくる子どもたちは、今はもう実社会で、仕事に若いエネルギーをぶっつけて活動している。結婚し、子どもを持った者もいる。社会人になった彼ら、彼女たちが、この本を読んだ時、どのようなことを思い、どのようなことを考えるであろうか。なんとも、苦しい気持ちになる。

自分の学級経営のすがたをまっ正面から書くということは、実に苦しいことだ。どう書こうと、結局は、教師としての自分の姿を白日のもとにさらけ出さなければならないからである。書きにくいところをいくら伏せても、飾っても、行間からいたらない多数の点が、読みとられるからである。

それをあえて書いてみたのは、第一編集部長の木田尚武氏から、これからの教師は変貌の激しい社会の中でどう歩まねばならないか、ということについて、かずかずの具体的な例のもとに示唆を受けたからである。つまり、一期生から十期生まで、十五年間にわたったくろんぼ学級の生活をいちおう総括することによって、おおかたの批判を受け、そこからさらに新しい構想を組み立ててみたい。そのようなねがいから、思いきって書くことにしたのである。

くろんぼ学級の子らと生活してきた十五年間の足跡を大別すると、次の三つに分けられる。子どもたちの心と心が結び合うことを基盤にして、豊かな生活をめざした時代。豊かな学級生活を背景にして、書くことを中心とした文化活動に熱中した時代。学級文化から学校、地域文化の創造へと発展した新聞活動の時代である。「くろんぼ学級物語」は、各時代ごとに、三部作で書きあげる予定である。学級づくりに情熱を燃やしておられる方々に、少しでも役立つものが

あったらと願っている。わたしの失敗した点を乗り越え、その上に、創意と工夫を加えて、新しいかたちの望ましい学級づくりを行なってほしいものである。

この本のために、寸暇をさいてわざわざ原稿をお寄せくださった三人の先生方には、勤務校がかわった今なお、心を支えてくれる人としてお世話になっている。教師としての姿勢のあり方を身をもって示してくださった上岡朋一先生、ともに励みあい、学びあうことのたのしさを感得させてくださった石塚守男先生、石川文吉先生をはじめ、先輩、同僚、父母のみなさん、おわりになってしまったが、毎々、編集の労をとってくださる櫻井芳子氏に、心からお礼を申し上げたい。

一九七四年早春

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

はじめに

第一章　やる気を育てる学級をつくるために……七

1　雨の降る日はしからない……七
2　あいさつは楽しいものに……一〇
3　ひとりひとりのねがいを知る……一二
4　時には特定の子に焦点をあてて……一三
5　遅れている子を見捨てない……一五
6　なかまはずれを出さない……一三
7　学習環境を変えることも……二九

第二章　まっ黒になって努力の汗を……三五

1　わたしはでもしか先生……三五
2　新学期の暗い出会い……四〇
3　折られた紙飛行機……四三
4　反抗する子ら……四六

5 わたしのミスではあったが……四九
6 母親の手紙を読んで……五一
7 真実の声を求めて……五六
8 読みきかせによって子どもの心を……六一
9 文集〝くろんぼ〟の誕生……六三
10 村上と三十八人の対決……六六
11 村上の作文が語るものは……七一
12 父母の作文を通して……七六
13 他県の学級に学んで……八三
14 伊勢湾台風と子どもたち……八六
15 成長した村上のこころ……九〇
16 他学級でも文集活動を……九三
17 チャンスにおれが打てなかったから……九六
18 試合には負けても……一〇〇

19 子どもたちの可能性を……一〇六
20 三十九人のねがいとやくそく……一〇八

第三章 〝くろんぼ〟の種を枯らすな……一二五
1 引き継がれた文集〝くろんぼ〟……一二五
2 君江のねがい、親のねがいを……一三五
3 日本一の学級づくりをめざして……一三三

第四章 低迷する子らと教師の反省……一三五
1 ひとさわがせな子どもたち……一三五
2 やはり、グループで活動がしたい……一四〇
3 おしゃべりチャンピオンとまん画狂……一四四
4 悔いが残った学級づくり……一五三

第五章 くろんぼ学級とわたしたちの生活……一五九
1 中学時代をどう過ごしたか……一五九
2 高校時代をどう過ごしたか……一六四

3　大学時代をどう過ごしたか……一六八
4　社会に出た現在……一七三
5　座談会　くろんぼ学級とわたしたちの生活……一七九

第六章　職場のなかまが見たくろんぼ学級とは……一八七

1　くろんぼ学級と私の学校経営……上岡　朋一……一八七
2　くろんぼ学級とわたしの願い……石塚　守男……一九一
3　くろんぼ学級と先輩、後輩……石川　文吉……一九七

カバーカット　秋元幸茂

第一章　やる気を育てる学級をつくるために

1　雨の降る日はしからない

国語の時間である。茂夫の様子がどうもおかしい。時折、雨の降りしきる運動場の方に視線を向けたかと思うと、また、教科書に目を注いではいるが、心はどこかにそれているようだ。目のいろを見ればわかる。教科書を持っている姿を見れば、すぐ気付く。姿態に、読もうとする気がまえが全く漂っていないのだ。

「萩原君、だいぶよく読めたね。」

と、わたしは朗読をした子をほめたあと、

「次の段落は、茂夫君。」

と、指名した。茂夫は、ぎくっとしたように首をすくめてから立ち上ると、はたして、どこから読んだらよいのか迷った。見かねて、並んでいる良子が教えようとした。

「なんだ、一時間めだというのに。ぼんやりして——。さっきからよそ見ばかりしていたな。運動場に、何か珍しい物でもあるのか。」

と、わたしはしかりつけた。

茂夫は、わたしの大声に驚いたのか、それだけで、今にも泣き出さんばかりの表情をしてうつむいた。

「この時間中に、もう一度さすよ。よけいなことなど考えず、今度こそ、しっかりやらなくてはだめだよ。」

と、わたしは言い重ねた。

わたしが放ったこのことばが、茂夫にとっていかに酷なものであったかを知ったのは、それからしばらく経ってからのことであった。

茂夫の作文には、次のようなことが書かれてあったのである。

しんぱいだったこと

この間の、雨のふる日だった。家を出るとき、弟とけんかをした。弟は、ぼくのこうもりをさして学校へ行こうとしたので、

「それは、おれのだよ。」

といったら

「いやぼくのだ。」

といって、きかなかった。なぜかというと、弟は、この前雨がふったとき、だれかにいたずらされて、こうもりにあなをあけられたからだ。それで、あなのあいていないぼくのこうもりがほしくなってしまったのだ。

「ずるいぞ。」

といって、取り返そうとしたら「やだ、やだ」といって、弟はこうもりをつかんではなさなかった。ぼくは、力いっぱい弟をつきとばした。弟は、ひっくり返った。そして、ズボンがどろだらけになると、大きい声を出してなきだした。その声をきいてやって来た母が、

「全く、しょうがない子どもらだ。」

といいながら、弟をなだめにかかっていると

「学校へ行くときまで、兄弟げんかをしているのか。」

といって、父が玄関までとび出して来た。そして、ぼくをはたこうとしたら、母が、

「朝からおこらなくてもいいでしょう。茂夫のいい分も聞いてやれば。」

といって、父をとめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「だからおまえはだめだってんだ。子どもにあまくって――。」
「でも、ほんとうは清の方が悪いんだから。」
「なに？　いくら何んでも、どろんこの中へつきとばした方が悪いんだ。兄きのくせに。」
と、今度は、父と母とでけんかを始めた。はらはらしていると、母が、
「茂夫、早く学校へ行っちゃえ。清はかあちゃんが、あとから送って行くから。」
といったので、ぼくは急いで、みんながまっている集合場所にかけて行った。
だが、学校に来てからも、ぼくはときどき家のことが気がかりでしょうがなかった。けんかを始めた母と父は、あれからどうなったのだろうか。つとめがあるのに、母は、清のことをほんとに学校につれてくるのだろうか、と心配ばかりしていた。それで、国語の時間には、
「ぼんやりしているぞ。」
と、先生にしかられ、ますます悲しくなってしまった。こうもりのことぐらいで弟をなかしたり、母と父とをけんかさせたり、つまらないことをしてしまったなあと、しきりにこうかいもした。
休み時間になった。二年の教室に行ってのぞいてみると、弟のすがたは見えなかった。
「どうしたんだろう。」
と、いっそうぼくは不安になった。
二時間めの算数の時間も、ぼくはおちつかなかった。先生の目をぬすんで、時々、運動場の方を見ていた。二時間めのおわりごろ、母と弟が校門からはいってきたのを見た時、ようやくほっとした。
休み時間、すぐ弟の教室へ行った。弟は、母といっしょに新しいこうもりを買いにおみせによったので、学校がおくれたということだった。
「もう、兄弟げんかはやめんべな。」
といったら弟も、
「うん。」

といって、笑った。家に帰ったら、弟となかなおりしたことを父や母に知らせ、けさのことをふたりであやまることをやくそくした。

学習中、茂夫がぼんやりしていたその背景には、子どもなりの心配ごとがあることまで、到底、わたしには予想だにしなかったことである。茂夫の心をくみとろうとする姿勢など、まるでなかったのである。授業をすすめようとする一方的な気持ちだけしかなかったことを、恥じないわけにはいかなかった。わたしは、子どもたちの表情から、そのときどきの気持ちや心を確実に、すばやく、深くとらえることのできる教師になりたいものだと願った。

また、雨の降る日は、子どもを絶対にしかってはいけないと心に決めた。出がけになって、こうもりがない。長ぐつが見つからない。晴れの日とはちがったあわただしさがあろう。雨の降る中を、ランドセルを背負ったほかに、こうもりを右手に持ち、左手には手さげまで下げて学校にやってくる子どもたちの心は、決して明るいものではないであろう。運動場で、思いきり遊ぶこともできないのだ。教室内はうす暗く、なんとも気の重い日にちがいない。けさ、家を出る時は気が重かったが、やはり、学校に来てよかった。友だちや先生と、楽しい一日が送れた——そういう気持ちを持たせるために努めなければならないことを、しみじみと反省させられたのであった。

2　あいさつは楽しいものに

始業のチャイムが鳴る。わたしが教室にはいって行くと、当番が「起立」と号令をかける。つづけて「礼」という声に合わせて、いっせいに、

「お早ようございます。」

という声が起きる。

こんな決まりきったあいさつで、一日のスタートを切るのは何とも味気がなさすぎる。そのあいさつの中には、きょうこそは……という意欲も、ファイトも乏しいようだ。きょうもまた一日が始まるという、あきらめにも似た無力感だ

けが伝わってくるようにも感じられる。

もっと「やる気」や「はりあい」を、子どもとともにわたし自身も持つことによって、充実した一日を作り出したい――そのような思いから、始まったことが、借りものでない、めいめいが自分のことばで気持ちを表わすあいさつを考えて行なう、ということである。当番が「礼」と号令をかけると、

「先生、きょうはいいお天気ですね。」

「きょうも、しっかり勉強にがんばります。」

「通分のしかたができるまできょうは家に帰りません。」

こういう気力にあふれたあいさつがあるかと思うと、時には、

「暑くなりそうですが、ぼくは顔を洗いながらがんばります。先生も、ぼやっとしていないで、顔を洗いながらがんばってください。」

こんな気合いもはいって、朝から大笑いになることもある。笑いからスタートを切る一日は、なんとはなしに子どもたちものってくるようだ。

こうしたことを、いつもいっせいに行なうだけでは飽きがくる。どの子もその子なりに前日とはちがったあいさつが言えるようになったころを見はからって、今度は、ひとりずつあいさつをさせることにした。子どもたちの登校前に、わたしは教室の入り口に立っている。そこで、やって来たひとりひとりとあいさつを交わすのである。あいさつのことばがつかえたり、スムースに言えない子は、廊下に出てランドセルを開く。昨夜、メモ帳に書きとめておいたあいさつのことばに目を落としてから、改めて、わたしとあいさつを交わすのである。

このようなあいさつのしかたは、土曜日の帰りぎわや、出張の前日にもよく行なわれる。

「あすの日曜は、おとうさんといっしょに釣りへ行くことになっていますので、きょうのうちに家庭学習を全部おわしてしまいます。先生も、日曜日は楽しくすごしてください。」

「きょうは休み時間に室内で大さわぎをして、先生にも注意をされましたが、あすは、みんなに迷惑をかけるようなことはしませんから、先生、安心して出張してください。」

子どもたちのあいさつの中には、うそはなさそうである。

3　ひとりひとりのねがいを知る

子どもたちは、毎朝、どのようなねがいを持ちながら、あるいは期待しながら学校へくるのであろう。何の考え、目的もなしに漫然と、仕方なしに登校してくる子も案外、多いのではなかろうか。やる気や生きがいを感じさせるには、具体的なはっきりとした目的を持たせて登校させるのも、一つの方法ではないかと思う。

わたしの教室の入り口には、「きょうのねがい」と記された小さな掲示板がある。ベニヤ板四分の一の大きさのもので、全児童の名まえが書き込まれ、各自の名まえの下には釘が打ってあり、八つ切りの画用紙を十六等分したカードが下げられるようになっている。

子どもたちは登校してくると、掲示板のわきに備えられた箱の中からカードを取り出す。そして、それぞれが、きょうはどのような目的を持って登校してきたのかをカードに書いて、掲示板の釘に下げる。朝のあいさつがすんだあと、わたしは掲示板の前に立って、ざっと子どもたちのねがい、目的に目を通す。

・きょうこそは、帯分数のひきざんをかくじつにおぼえたい。（清次）
・ろうどくの練習をしてきたので、国語の時間にぜひ読んでみたい。（幸江）
・きょうの給食は肉がでるが、のこさず食べるようにがんばりたい。（繁）
・放課後、一組とソフトのしあいがあるが、一発、ホームランを打って、みんなをあっといわせたい。（敏夫）
・学級文庫の本を、きちんとせいりしておきたい。（保）
・放課後、赤小タイムズ（学校新聞）を作らなければならないから、帰りがおそくなるだろう。暗くならないうちに帰れるように、休み時間に取材メモの整理をしておこう。（由美子）
・三男君が、きょうもそうじをいっしょうけんめいやってくれるといいな。（浩）

学習上のこと、生活上のこと、さまざまな目的、ねがいが書かれている。

「なるほど。清次君は、きょうこそは帯分数のひきざんを……と言っているね。きみがこんなにやる気十分でいるとは、先生はうっかりしていて知らなかったよ。よし、がんばれ！」

「保君は、よく勉強する子だということはわかっていたが、係りの仕事もよくやろうと考えているんだね。また一つ、きみのよいところを見つけたぞ。」

わたしは何人かの子に声をかけ、その子のやる気を刺激するとともに、それとなく周囲の子どもたちにも認めさせたり、意欲をあふったりする。また、

「三男君はいいなあ。浩君みたいに心配してくれる友だちがいるんだから。ふたりは、仲よしなんだね。」

と、リーダーと問題児との心を結びつけるためのはたらきかけもする。

もちろん、学習時間の中においては、できるだけ、「きょうのねがい」に書かれたことを取り上げていく。それぞれの子どもたちのねがいを、一日の生活のどこかでみたしてやることによって、やる気や生きがいをさらに高めていきたいと努めている。

4　時には特定の子に焦点をあてて

「きょうのねがい」の掲示板には、子どもたちの書いたカードのほかに、教師自身――わたしのねがいもカードに書いて下げておく。

・けさは、詩の手帳をだれがあげて（提出）くれるかな。

・きのう幸子さんは、家で日本の農業の下調べをやってくるといって帰ったけど、どのくらいにまとめることができたかな。

・きのうの放課後、先生の机の上をきちんと整理してくれたひとがいたが、だれだろう。

・おひる休みは、みんなと中線ふみをして、うんと遊びたいな。
・敬子さんのおばあちゃんは入院してから、もう一か月にもなるが、よくなったかな。敬子さんは、おかあさんのかわりに、どんな手つだいをしているのかな。
・きょうは土曜日だ。勉強をみんなとばりばりやって、午後はうんとうんと遊ぶぞ。谷中へさかなつりに行くんだ。そして、いっぱいつれたら学校の池にいれるぞ。
・ゆうべはおそくまで文集づくりをやっていたから、きょうは少しねむいな。このねむさをすかっとふっとばしてくれるほど、算数の時間に大かつやくをしてくれるひとはいないかな。

このようなことを書くことによって、子どもたちにわたしの思いや気持ちを知らせる。知らせることによって、学習の意欲をさそったり、ある時は、先生だってぼくたちと同じように遊ぶことも考えているんだなと安心させ、子どもたちとの心の結びつきをはかっている。

・このごろ、孝雄君は読みとりがだいぶ正確になってきた。きょうも、びしびしさしてみよう。

こういうことをカードに書いた日、国語の時間になると、わたしはそれこそ孝雄が少しも気をゆるめるひまもないほど、指名していく。徹底した集中的な指導である。

どの子にも、まんべんなく活動の場を与えるということだけではなく、時によってはこのような指導も随時、行なっている。それはさながら、球技の練習における特訓のようなものである。一度つまずいては起き上り、また、つまずいては立ち、何度かこのような指導をくり返すことによって、普通程度であった孝雄の読解力は、自信を得たこととともにめざましく向上していった。

ある特定な子に焦点をあてた集中的な指導は、その日一日中、続くこともある。

「先生、きょうは前田デーだったね。前田君もなかなかやるねえ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com